

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

月

平成28年9月第2週放送

間もなく十五夜を迎えます。来月には十三夜じゅうさんやもあり、月と親しむには絶好の季節です。月は、太陽ほど強い光を発することはありませんが、古来より神聖なものをそこに感じ取りながら人々は月と向き合って来たように思います。特に日本では秋の深まりゆくこの時期に、二度つきみの月見をいたします。一度ならず二度月見をするごとに、仏教との不思議な縁を感じずにはられません。

ところで、皆様は仏教とどんな出会いをなさっていらっしゃいますか。その出会いの中で一番多いのは、本で読んだり誰かのお話を聞いたりすることなのではないでしょうか。そのとき私たちは、言葉や文字を通じて仏教に触れることになりませんが、しかしそれは仏教の入り口にしか過ぎません。

そのことを仏典では、“月”と“月を指し示す指”の喩えを用いて教えています。私たちは“月を指し示す指”ばかりを見ていて、実は“月”そのものを見ていないのではないだろうか、その喩えは私たちに警告けいこくを発しています。

言葉や文字を通じて頭だけで理解した仏様ほとけさまの教えは、あくまで月を指し示す指さ ゆびでしかなく、仏様の教えそのものである“月”ではないのです。

このことを、弟子の峨山がさんぜんじ禅師に伝えるために「二つの月の喩え」を用いたのが、大本山總持寺をお開きになられた瑩山けいざん禅師です。「両箇りょうこの月」(二つの月)という逸話いつわとして伝えられているお話しです。比叡山ひえいざんで仏教学を修めた若き峨山禅師に、瑩山禅師は「月が二つあることを知っているか」と、おたずねになりました。しかし峨山禅師には何のことかさっぱり分かりません。その問いに答えるために、峨山禅師は修行に邁進まいしんされ、ついに瑩山禅師の指を鳴らす音を聞いた瞬間、その真意しんいを悟さとったと伝えられています。

“二つの月”とは、天上てんじょうに輝く月と、自らみずかが宿やどしている月のことです。仏様の教えを象徴する“月”は、外側から常にその光を私たちに注いでくれています。その教えをいただく私たちは、言葉や文字を通じてそれをわかったつもりになっているようですが、それは仏様の示された教えそのものではありません。自分の外側に見えている月、それは実のところ月を指し示す指さ ゆびでしかないのです。

私たちが仏様の教えを受け止めて自分のものとし、自らの生き方や生活の中に活

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

かすことができはじめてその教えは本物の“月”となるのです。ですからそれを受け止め、実践する私たち一人ひとりにも同じ月が宿っていると瑩山禅師は峨山禅師にお伝えになられたのです。

このように、喩えられた“月”のことを、道元禅師は「あらゆるはたらきを具えたもの」と表現されています。

「二つの月」と、「二度の月見」。

仏教ともゆかりの深い“月”を身近に感じながら、この季節に鑑賞なさってみてはいかがでしょうか。

— 終 —